大崎市が進める地方創生③

地域に新しい風を吹き込む

地域おこし協力隊

1【左】佐藤匠太さん、【中央】師匠の佐藤建夫さん、【右】廣澤明彦さん
2 800膳の箸づくりから２人の修業が始まった
3 鮮やかな木目が美しい佐藤建夫さん作の拭き漆のお椀

地域おこし協力隊は、自らの意志で、地方での自分らしい生き方を追求しながら、地域社会へ貢献していこうとする都市圏の若者たちに、人口減少などが進む地方に来てもらい、地域力を維持・強化していく取り組みです。任期は最長３年で、いずれは、地域の一員としてその地域に定住してもらうことも、この事業の目的に含まれています。

昨年９月、後継者不足が進む「鳴子漆器」の担い手として、埼玉県出身の廣澤明彦さんと仙台市出身の佐藤匠太さんの二人が、大崎市初の地域おこし協力隊員として着任しました。

鳴子漆器は３５０年の歴史ある伝統工芸で、経年により木目の美しさが際立つ「木地呂塗」や、漆を薄く塗っては拭き取りを繰り返す「拭き漆」などが特徴で、国の「伝統的工芸品」、宮城県の「みやぎ伝統的工芸品」に指定されています。しかし、その技を受け継ぐ職人は、現在６人ほどとなり、後継者の育成が喫緊の課題となっています。

今回の事業で、指導にあたる鳴子漆器職人の佐藤建夫さんは、「今は箸を８００膳作らせています。１６００本を仕上げることで、漆器づくりの基本を身に着けさせることが目的です。家族のように毎日を過ごす中で、わたしもたいへん刺激を受けていますし、彼らの成長や未来を想像するのが楽しみです。地域おこし協力隊としては任期がありますが、地域にしっかりと根を張って、鳴子漆器を生業としていけるように、継続的に指導・支援していきたいと思っています」と話します。

着任から３カ月が経過した廣澤さんと佐藤さんは、「地域の皆さんに本当にあたたかく迎えていただき、大崎市のたくさんの魅力に触れながら、日々、新鮮な気持ちで修業に打ち込んでいます。漆は温度や湿度などによって、乾き具合が変ってきます。その日の天候にあった漆を選び、適度な厚さで均等に塗る。今はその技術の奥深さに圧倒されるばかりで、経験を重ねることで自分のものにしていくしかないと思っています。鳴子漆器制作の技術を身につけるという本分をしっかりと行いながら、地域の一員としても、より多くの人たちと交流を図り、大崎市で生きる術や楽しさを共有していきたいと思います」と話してくれました。

市では今後も、地域に新しい風を吹き込む力として、地域おこし協力隊員を募集し、必要とする人材を採用していく予定です。

▲12月11日に鳴子公民館で開催された「鳴子温泉郷ワークショップ」に隊員の２人も参加。地域の皆さんと一緒に、鳴子温泉の魅力について考え、話し合った

この10年で強固な組織へと成長

～ 大崎市消防団 ～

大崎市消防団
第四代団長 佐藤 技 さん

活動の概要

平成18年に設立。7支団56分団、団員数2,370人を誇る県内でも特に大きな消防団の1つ。火災、風水害、地震などの災害対応のほか、各種訓練や広報活動など、年間を通して活動している。今年９月30日に秋田県で開催される全国女性消防操法大会へ、宮城県代表として出場が決まっており、随時、女性団員を募集中。

大崎市発足と同じ平成18年に大崎市消防団が設立されました。

旧市町ごとに災害の特徴が違ううえに、連綿と受け継がれてきた歴史ある消防団が一つになるということは、並大抵な事ではなく、はじめはかみ合わない部分があったことも否めない事実です。

大崎市消防団としての一体感を醸成するため、7つの支団ごとに行う消防演習と、支団の枠を越えて1,400人規模で行う、全団による消防演習を隔年で行うようになり、また、毎年のように発生する自然災害への対応から、支団同士が互いに協力し合う組織風土が生まれるなど、この10年で着実に結束力を高めてきました。

昨年3月には消防庁長官表彰を、9月には防災功労者内閣総理大臣表彰を受け、今、大崎市消防団は名実ともに、市民の生命・財産を守る強固な組織に成長したと自負しています。

全支団が一同に会して行う消防演習の様子

また、装備についても軽積載車両を増やすなど、各地域に均衡ある防火体制の整備を進め、広報活動にも力を注いでいます。

一方で消防団員は、地域の一員でありますので、東日本大震災以降、特に活性化している自主防災組織においても、地域の防災をリードする立場で積極的に参画してほしいと考えています。

今後も大崎広域消防、行政、婦人防火クラブ、自主防災組織などと連携を密にとりながら、大崎市の防火防災の一翼を、団員一丸となって担っていきたいと思います。

道路を利用するみんなで築く、交通安全

～ 三本木交通安全ボランティア～

三本木交通安全ボランティア
代表 佐藤 俊一 さん

活動の概要

平成16年から、三本木交通安全ボランティアとして、交通指導隊OBや地域の仲間たちと活動を開始。「40km走行」「水はね注意」と書いたプレートや制服を独自で制作し、歩行者と運転手、それぞれの目線に立って、交通安全を推進する広報活動に力を注いでいる。

三本木地域は、国道4号をはじめ、東西南北に道路がはしる交通の要衝です。

交通指導隊の活動を退いた12年前、子どもたちの安全な通学のサポートをするため、交通指導隊OBや地域の仲間とともに、三本木交通安全ボランティアの活動を始めました。毎朝、三本木小学校前で子どもたちの見守りや声掛け、ドライバーへの交通安全アピール活動を行っています。

危険だと思われる運転や、道路の横断を見かけたときは、子どもと大人、どちらに対しても、頭ごなしに注意しないよう気をつけています。

毎朝の呼びかけ活動の様子

交通ルールの大切さを気づいてもらう工夫として、柔らかな言葉の選択とコミュニケーションは、活動当初から重要視してきたことのひとつです。共に三本木地域に暮らし、道路を利用するもの同士、互いに尊重し合いながら気持ち良く暮らしていくために、これからも心掛けたいです。

三本木地域は現在、市内で唯一、交通死亡事故ゼロ2000日を更新中(12月18日現在2149日)です。さまざまな立場の人の努力と地域の皆さんの心掛けが、少しずつ積み重なり、結果として数字に表れてきているものだと思います。

これからも、三本木地域に暮らすみんなが安全に、安心して暮らしていけるよう、交通安全活動を支援していきます。